

評・森本 あんり（神学者  
東京女子大学長）

「教養小説」と銘打たれているのに、主人公は老年で、その人生は何の成長もなく閉塞したままである。アメリカ映画のようにわかりやすい結末もない。だが、物語は読者の心の奥深くに棲みつき、本を措いた後で何日も解けない問いを発し続ける。とても上手に紹介できる自信はないけれど、奇妙な把持力のある小説だ。

ドイツ東部の廃れゆく町で生物学を教えるインゲ・ローマルク。キリンの首といえは「獲得形質の遺伝」と「用不用説」を主張したラマルクだが、彼女は長年教え続けてきたその教義を固く信じている。世界はすべて競争であり、適者のみが生き残る。ワシは卵を二つ産むが、餌

## 「適者生存」妄信する教師



◇Judith Schalansky  
=1980年、旧東ドイツ生まれ。作家、ブックデザイナー。大学では美術史などを専攻。

の少ない過酷な環境では、先に孵ったヒナが後のヒナをつついて殺してしまふ。旧約聖書にあるカインの兄弟殺しに因んで「カインズム」と呼ばれる行動だ。「だったら、そもそもなんで二つ卵を産むんですか」「もちろん、スペアです」「でも、親鳥は？」「見ているだけです」こういう冷たく乾いた対話が終始進められる。

職員室では、旧東独時代に育てられた同僚教師がまくし立てる。曰く、遺伝学はブルジョワ的だ。すべては生まれと素質で決まり、貧乏人は貧乏人、金持ちは金持ちのままだなんて。だが、同志ルイセンコは違ふぞ。存在が意識を規定するんだ。小麦の種も寒さに晒せば強くなるように、環境と努力次第で人間も変わる。そうやってわれわれは資本主義を克服するのだ。

でも、と彼女は思う。自然は克服できない。生徒の前では自信に満ちて峻厳な彼女だが、私生活では夫からも娘からも疎外されている。人間の愛も自然の法則に従うだけで、不幸だが同情には値しない。自然に不公平はないのだ。

「変化」を「進歩」と取り違えてはいけない。装幀家でもある著者の趣向で、随所に細密な生物の絵が挿入されている。ちなみに、キリンの首がなぜ長いかは、遺伝学では今も未解決の問題らしい。細井直子訳。

# キリンの首

Der Hals der Giraffe

ユーディット・シャランスキー著

河出書房新社 2970円